

工学部が読売新聞に掲載されました

学校 自慢



同校には「工学部」という一風変わった部活がある。8人の部員は、太陽光発電で走るソーラーカーを手作りし、レースでの勝利を目指して活動している。

工学部は、鈴鹿サーキット（三重県鈴鹿市）で開かれるソーラーカーレースの全国大会に8年前から参加し、18歳以下の部門で優勝1回、準優勝2回という実績がある。

大会に参加する学校の多くは専門知識を学ぶ工業系の学校だ。しかし、工学部の部員たちは、農業を中心に学ぶ生産ビジネス科と「普通科」の生徒。設計から溶接、レースでの運転操作などの全てを

千葉黎明高校（八街市）

部活でソーラーカー作り



運転席の調整を行う部員たち（千葉黎明高校で）

こなし、優勝するのは至難の業だ。

部員は、車作りの基本を図書館の専門書などを読んで独学する。そして手作りしたソーラーカーで走行実験を繰り返し、空気抵抗や燃費のデータを収集し、そのデータを基に車体の形などの改良を繰り返す。まるで自動車メーカーの開発部門だ。部長の藤井佑樹さん(17)は「今でもわからないことだらけ」と謙遜するが、顧問の石井弘教諭は「生徒が作るソーラーカーの性能は間違いない」と、部員たちの努力の結晶に太鼓判を押す。

ソーラーカーの製作は資金集めも一苦労だ。1台作るのにかかる費用は数百万円。完

よ

成後も改良するたびに費用が必要になる。そこで部員たちは、県内の畑で里芋や落花生などを育てて販売し、売り上げを活動費に充てている。そんな工学部を地元企業や住民も支援しており、複雑な部品は八街市内の会社が協力して作っている。

困難を乗り越えながらソーラーカーに打ち込む理由について、藤井さんは「とにかく鈴鹿で優勝したいから」と話す。石井教諭は「全てを注ぎ込み、挑むレースだからこそ、途中で諦めることができない。彼らの中には優勝しかないんです」と部員たちの熱い思いを代弁する。

歴代の先輩や現役部員の苦労が詰まった「黎明流ソーラーカー」で、これからも鈴鹿での真剣勝負に挑み続ける。

（鈴木慎平）